

年間第20主日

福音朗読 ヨハネ6・51-58

2024.8.18 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

昨日は、主に千葉県の教会に集まっているフィリピンの人たちの勉強会というものが習志野教会でありまして、わたしも見に行ったのですが、それは、典礼の中でいろいろなご奉仕があります、その係の勉強会でした。講師は、CTICカトリック東京国際センターのわたしの同僚でありますフィリピン人のエドウィン・コロス神父様だったんです。

エドウィン神父さんがいろいろそれぞれの——先唱とか侍者とか、朗読とかありますがミサの中での奉仕について話してくれました。そして、実際に集まっている人たちも奉仕に携わっている人がほとんどだったわけなんですけども——それぞれの係の注意事項とか、その意味とかいうことをずうっと説明してくださったというわけです。その中で、ある意味で一番難しい係だっというふうに神父さんがおっしゃったものがあって、それは、英語で言うとアッシャー(usher)——日本語で言えば案内係かな——がある意味で一番難しいというふうにおっしゃいました。それは、人々を迎え入れる、そういう役割だからだ、と。

案内係は、やって来る人に、自分の気持ちではなくてイエス様の気持ちで、イエス様に成り代わって微笑んで迎えて入れるのが役割です。席に案内するとかありますけども、イエス様の気持ちでやる。でも来る人たちは案内係の人をイエス様とは思わないから、そんなに尊敬的な態度は示してくれない。「こちらにどうぞ」って言ってもその指示に従わない場合もあるし、時には案内係の人のほうを見もしない。そういうようなことはある。それがあっても、自分にフォーカスするのではなくて、相手を第一に、そして人々を迎え入れたいと思っているイエス様の思いで奉仕しなければなりません。人間を相手にすることだからある意味では一番難しいのではないかっていうような話でした。

それは、案内係に限らず、わたしたちはキリスト信者として、自分の思いではなくて、イエス様の思いをそれぞれの他の人への態度で実現していくように呼ばれている。それが洗礼の招きということです。

そして、今日の福音では、イエス様がそのための命をご自分の肉、ご自分の血によって与えてくださるとおっしゃっています。それは、もちろんわたしたちは御聖体のことをお話しされているというふうに理解するわけですけども、その御聖体そのものを通してイエス様の恵みをいただいて、わたしたちがイエス様

の心を自分の心として、^た他の人々にイエス様がなさりたいように接するというふうに変えられていくというふうに信じます。

ヨハネの福音書は、今日の福音では御聖体について話してはいますが、最後の晩餐のときにはイエス様が弟子たちの足を洗って、「わたしがこのようにしたので、あなたがたも互いに足を洗うように仕え合う、愛し合う、そういう者になって欲しい」という言葉を言い残されたというふうに伝えています。

^{ほか}他の福音書、マタイ、マルコ、ルカ——古い順にいけばマルコ、そしてマタイとルカが大体同じくらいの時代なのではないか、これは学者たちの研究で言うことですが——では、最後の晩餐のときにイエス様が、わたしたちがミサのたびごとに記念しているように、パンとぶどう酒をこれがご自分の身体であり血であるのだというふうに御聖体の秘跡を制定して、残してくださったということをお話しているわけです。

ヨハネの福音書は御聖体については今日の6章のところで話して、最後の晩餐のときにはイエス様が弟子たちの足を洗ったよ、ということをお話しています。それは、ヨハネの福音書を書いた人が、御聖体の意味を誤解してほしくない、そういう思いで最後の晩餐のときにイエス様が弟子たちの足を洗ったという出来事を話しているというふうに考えることができます。

御聖体は決して自分の願いが叶うための何か特別の力を得るものではないし、また肉体の命を長らえさせる不老不死の妙薬ではないのだ、と。そうではない、互いに愛し合うためにイエス様がくださるイエス様の心なんだ、ということをお話しています。それは、ヨハネの福音書が時代的に一番後に書かれた福音書だということを考えると、より意味深く感じられます。マルコやマタイやルカの福音書を通して御聖体のことを保持している教会の中に既に御聖体というものを間違えて解釈する、そういう人たちが出始めたのではないかなど、それを受けてヨハネの福音書は、「この恵みは愛し合うために、そういう者になっていくためにイエス様が残された恵みなんだ」ということを、敢えて聖体を制定されたというふうに伝えられている最後の晩餐の席上で直接パンとぶどう酒についてのイエス様の言葉ではなくて、そこに込められた思いを表わす——繰り返しになりますけれども——弟子たちの足を洗う、そして「互いに愛し合いなさい」という思いを伝えることを通して、思い違いないようにというふうに人々に残しているのではないかなと思います。

わたしたちもその思いで、いつも御聖体を通してイエス様の心を自分の心に入れていただく、受け取っていく、その思いで御聖体の恵みをいただきたいと思えます。

ですから、肉体的に御聖体を拝領できない場合でも、もっと大事なものは心の中で、いわゆる霊的聖体拝領が大事ということです。もちろんそれを意識するために目で見て手で触れることのできる形でお迎えするようにしてくださった、そ

これは大きな恵みなんですけど、でもご病気とか、あるいはまだ洗礼を受けてないとか、いろんな状態で物理的に御聖体を拝領することができなくても、心の中でイエス様をお迎えする、その思いを新たにすることが一番大切です。

逆に言うと、物理的に、物質として御聖体を拝領していても、その信仰——イエス様をお迎えして「どうぞわたしの心の中にあなたの心をください」という思いがなければ、恵みは力を発揮されなくて、イエス様ご自身なのに、単なるちっちゃな食べ物としてわたしたちの身体を通り過ぎていくということになってしまうわけです。

わたしたちがいただくその恵みは、普通の食べ物だったら、口に入れるならば自動的にそれを自分の中に栄養として取り込む、そういうシステムが身体の中で働いてくれるわけですが、神様から、イエス様の霊的な恵みは信仰をもって「イエス様、どうぞわたしの身体の中で働いてください」という思いを持ってわたしたちの側が受け入れなければ、自動的にわたしたちの糧かてになっていくということはない、という面もあるのではないかと思います。

今日、わたしたちが改めて、互いに愛し合うためにご自分の心をわたしたちの中に与えようとされる、それがイエス様のおっしゃる「まことの食べ物」、「まことの飲み物」である、それをミサのたびごとにわたしたちが御聖体の恵みとして受け取っているのだということ意識しながら、改めて意識しなおしながら、それぞれの中で具体的にわたしたちがほんとに愛すること、イエス様の思いをただかなければならないいろんな場面の中で、イエス様の力を発揮していただくことができますように、お互いのために助けを願い合いながら、このごミサを通してイエス様を、その心を一人ひとりの中にイエス様の心をお迎えしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>